

# 「土を耕して土になじむ精神を。食べものをいただくという感謝の気持ち。」



大地の栄養がたっぷりつまった国産大豆の豆腐に舌鼓。



田下さんが持参した国産大豆のおぼろ豆腐を「おいしい、おいしい」と、みごと完食。

## 田んぼや畑のある風景を守る

近年は環境保全の必要性が増していますが、農業にはどのようなつながりがあるでしょうか。

**小沢** 農地には緑の環境を固定するという機能があります。田んぼは遊水池として水害対策にもなっている。田畑は自然を保持しながら災害対策にも役立っています。

**横田** 私たちが農業を始めたのは環境問題に関心を持ったことがきっかけでした。できれば子どもたちに畑を受けついでもらいたいなと……。  
**小沢** 素晴らしいですね。日本人はもともと農耕民族ですから、土を耕して土になじむ精神を子孫にも伝えるということ、とても大切なことだと思います。

## 感謝の心、思いやりの心を大切に

—— 育ち盛りのお子さんをお持ちの阿部さんは、孤食などの食をめぐる問題についてどうお考えですか。

**阿部** 食べ物健康な心からだをつくるための土台になるものだと思います。ところが最近、学校で給

食を食べるときに「いただきます」を言わなくてもいいという考えの人がいるそうです。食べ物をいただくという感謝の気持ちがなくなってきたのは悲しいことです。

**小沢** 大人がそんな考えではないかなと思います。昔はごはん一粒残しても、「お百姓さんが一生懸命作ったものを」と怒られたものです。それがいまはたくさん食べ物を残して捨てているでしょう。私は党の若い者にも「あちこち手をつけて残すなら食べるな」と言っているんです。

**阿部** 私は、日本はもともと貧乏になつてもいいのではないかとさえ思います。  
**小沢** 「衣食足りて礼節を知る」という言葉があるように、あまり貧乏になるの

は困るけれど、食べ物に限らず、ご主人や奥さんを大切にしよう、お互いを大切にしようという気持ちが薄れてきていますね。最近「もったいない」という言葉が再び注目されていますが、もともと、ものや人を大事にしなければ。  
—— それでは小沢さん、最後に今日のご感想をお願いします。

**小沢** 食料自給率を維持するためだけでなく、自然環境を守るうえで、日本人の心を育むうえで、さまざまな角度から農業を支援していかなくてはなりません。今日は若くして新しく農業を始めた皆さんのお話を聞いて、非常に頼もしく感じました。私も「戸別所得補償制度」などの実現に向け、力を尽くす所存です。



対談を終えた後は全員で記念撮影。このあと、小沢さんは別の訪問先へ。



釣り好きの小沢さん。魚をさばくのもお手のもの。



持ち主である鈴木さんと、地域の歴史などを語り合う。

## 小沢さんとの対談を終えてひと言

### 高橋陽子さん

「緊張してうまく話せないのではないかと考えていたのですが、本当に気さくな方ですね。テレビなどで伝えられる農業のイメージがあまり良くないと感じていたので、そのことをお話しできてよかったです。」

長い交際の末、結婚に至ったご主人が就農を決意し、田下さんのもとで研修を受け、有機農業を始めて4年。2人ともまだ20代で、将来が期待される若手の生産者。音大卒の陽子さんがピアノの先生をやりながらご主人の農業を手伝っている。

### 阿部幸子さん

「どれもつなげるようなお話で、農業の実情をよくわかっていただけていると感じました。政策に関しては予算の問題など難しい面もあると思いますが、いろいろな課題に積極的に取り組んでいただけたらと思います。」

「ご主人と共に有機農業を始めて3年。自然の多い場所で生活したいと考えていたときに、農業大学のカリキュラムで田下さんの農場を見学したことがきっかけ。現在はご主人が環境関連コンサルタントとして働きながらの兼業農家。」

### 横田智恵美さん

「ご実家が農家というだけあって、さすがに生産の現場をよくご存じですね。農家に嫁いだなんて、すごいね」と驚かれましたが、主人の実家のまわりも農家ばかりだったので、小沢さんのお話を伺って親近感が湧きました。」

兼業農家のご主人のもとに嫁いで約20年。当時は化学肥料や農薬を使う慣行農法。子どもがアトピー、性皮膚炎になったのを機に、智恵美さん夫婦の代から有機農法への切り替えを決意、ついに専業化に至る。

### 田下三枝子さん

「想像していたのと違って、とても気さくな方でした。お豆腐は1日1丁召し上がっているそうで、本当に和食がお好きのようです。新規就農者の支援や有機農業の推進につながるような政策もお願いします。」

自給を中心に、自然と共生する農業を目指す「小川町有機農業生産グループ」(埼玉県)代表。学生時代、環境や食糧について研究。その後、夫婦で有機農業を始めて23年。現在は就農支援の一環として新規就農希望者の研修も行っている。



田下さんの農場。露地野菜3.5ha、水稲50a、麦・大豆50aを完全に無農薬有機栽培し、経営している。セットで野菜を宅配するほか、都内の自然食品店に共同出荷も行っている。

インタビュー  
本誌記者 中山薫  
食と健康をテーマに広告、雑誌、広報紙などで執筆活動を行っている。家庭では主婦。